

令和5年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月4日実施)	総合評価(3月31日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	①育てたい生徒像を職員間で共有し、「主体的・対話的で深い学び」を組織的に実現する授業づくりを推進する。 ②ICTを利活用し、問題発見・課題解決能力や情報活用能力の育成に努める。	①「主体的・対話的で深い学び」を教科毎等組織的な取組としてさらに深化させ、授業改善を図るとともに、適切な評価につなげる。 ②すべての教員がICT機器(iPad)を積極的に活用した授業づくりに取り組む。	①組織的な授業づくりを推進するため、授業改善のための教員研修の実施及び内容の更なる充実を図る。 ②すべての教員がICT機器(iPad)を積極的に活用する意識を高める。	①すべての教員が「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業づくりを行い、適切な評価を行うことができたか。 ②ICTを利活用した授業等に取り組んだ教員が7割以上いるか。	①教員間で教材の共有や意見を出し合いながら、探究的な学びにつながるよう授業改善を行うことができた。 ②生徒自身ICT機器を活用し学習する機会を増やせるように多くの職員で授業づくりを行うことができた。	①全学年で新学習指導要領になることから、教員間で意見交換を行いながらより一層「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを行っていく。 ②ICTを利活用した授業づくりが進んでいく中で、機材の故障等トラブルもあった。今後は機材等のメンテナンスもしっかり行っていく。	①学びと社会や産業との関わりを理解して深い学びを実践することも大切である。 ②スクール・ポリシーの中に、何か目玉となるプロジェクトを打ち上げてみてはどうかか。 ③スクール・ポリシーについて、国内の課題についても理解させることも今後大切になる。 ④ブランドデザインにウエルビーイングという言葉を入れたらどうか。	①主体的・対話的深い学びの実践については、多くの教員がスクール・ポリシーを理解し取り組むことができたことは成果と言えるが、依然取組について教員間での温度差があることは課題である。 ②ICTを活用した授業への取組についても同様に操作が苦手な教員は活用頻度が低い。次年度は一人一台端末がすべての学年で整うことから授業の中で積極的に活用していく必要がある。	①今年度の生徒による授業評価等を検証し、各教科間あるいは職員全体で次年度に向けた課題を共有しながら組織的な授業改善を進めていく。 ②研修等を通じすべての教員がICT(iPad)を活用して授業が行えるようにする。また、教室だけでなく特別教室や体育館でもICTを活用できるようハード面での整備を進める。
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	①生徒が主体となって活動することにより、共感力や自己肯定感を育成する。 ②社会の出来事に関心を持ち、責任ある態度とリーダーシップを育む。	①生徒が運営する行事、生徒が主体となって取り組む部活動を確立させ、豊かな人間性や社会性、リーダーシップ等を育成する。 ②日頃の生活指導や交通マナー指導等を通じ、規範意識の醸成と自ら律する態度を育成する。	①生徒が学校行事や部活動を主体的に計画し、他者への尊重や協調を重視しながら充実した学校生活を送れるよう支援する。 ②交通安全講演会等で自転車に関する道交法を周知し、危険予測等、交通安全へのスキル向上を図る。	①学校行事、部活動において、生徒が主体的に活動できたか。他者を尊重し協調することができたか。 ②登下校時の自転車での事故数が減少したか。交通ルールを守ることができているか。	①学校行事は、一般公開することによって多くの方々に参加していただき、生徒が主体的に計画して、新たな取り組みや工夫ができた。部活動の取り組みもコロナ以前に近い形に戻っている。 ②相模原市委託事業の交通安全講習会を開いたり、地域と連携して交通安全指導を行ったりした。また、学期始めに学校周辺において自転車通学生徒対象に指導を行った。	①体育祭や文化祭などの学校行事の在り方や部活動の運営方法を、単にコロナ禍以前に戻すのではなく、今の時代に対応した新たなシステムに積極的に変更する等、より良い活動となるよう改善する。 ②交通安全講習会や通学時間帯の交通安全指導を継続的に行っていく必要がある。また、今後、自転車乗車時のヘルメット着用指導を進めていく必要がある。	①生徒の強い自立心から、大きく羽目を外さず健全な学校生活を送れていると感じる。教員が温かく生徒を見守っている。平穏な校内の雰囲気を持っている。 ①50周年記念事業が生徒主体で挙行されたことは大いに評価できる。今後は各行事における生徒主体の事業計画が行えているので、ぜひ事後の事業評価も生徒が行われるとよい。	①体育祭や文化祭では、年々生徒が自ら企画や運営を手掛ける等、生徒の主体的な取組がより前面に出るようになったことは大きな成果である。今後の課題として、今後気候変動による気温の上昇や生徒の学習への取組を考慮した開催時期の検討や運営方法の見直し等が必要である。 ②年間を通じて大きな交通事故はなかったものの、自転車と車の接触事故は発生している。交通安全教育や自転車乗車指導については、9割以上の生徒が自転車通学をしているため、季節を問わず継続して行っていく必要がある。	①年間指導計画全体の見直しを図り、例えば体育祭と文化祭を9月に同時に開催することによって学習とのメリハリをつける等、抜本的な改善を図っていく。 ②学校周辺のハザードマップを作成するとともに、教員が定期的に危険箇所を立てて交通安全指導を行う等の計画を立てる。また、ヘルメット着用の義務化についても検討を進める。
3 進路指導・支援	①自らの将来に関心を持ち、深く探究する力を育てる。 ②進路実現を組織的に支援する進路指導体制を整備する。	①キャリア教育をよりいっそう充実させ、様々な職業への理解促進と社会で求められる働き方等についての認識を深めさせる。 ②データを活用した個別進路指導等を充実させ、進路実現に向けチャレンジする姿勢を育む。	①総合的な探究の時間や進路イベントへの参加に加え、本校卒業生による講演会を実施し、働くことの意味への理解を深める。 ②模試や英語技能検定の全体平均点や得点率の低い課題点を分析し、解決に向けた具体の支援を行っていく。	①本校卒業生による講演会等の進路イベントを通じ、職業観について生徒が主体的に学び、働くことへの理解を深めることができたか。 ②模試の平均点や英検の合格率が上昇したか。生徒自身が課題を把握し、解決に向け取り組んだか。	①キャリアに関する講演会を実施する余裕がなかったため、総合的な探究の時間で興味ある職業について考える場面を設け、自ら将来について探究させることはできた。 ②模試や英語技能検定の結果データから課題を明確化し、その解決に向けた対策を生徒や教員と共有し、具現化しようとしている。	①社会人として豊富な経験のある方等に講演してもらった場面を設定し、生徒自身が自分の興味・関心の幅を広げると同時に、チャレンジする姿勢を育む必要がある。 ②模試では英語の偏差値が5年以上に渡りやや低迷していることが課題であり、学校全体でさらに英語力を養う仕掛けを考案し、実践しなければならない。	①入学後、早い時期からキャリア教育(進路指導)を実施し、大学を実際に見学に行くなどして受験までの計画を立てさせる必要がある。 ②年々年内の受験が増加する中、塾や予備校の新指導を学校にも取り入れることが必要になってくる。 ③英語力を養うことについて、英検と併用してTOEICの導入を検討することによって3年間の変容を分析するのが良い。	①総合的な探究の時間を活用し、自ら将来について探求させたことは、自分自身の強みや適性の発見につながった。今後、さらに講演会や体験講話等の実施を通じ、より早い段階から自分の将来について考えさせることが課題となる。 ②模試や英語技能検定の結果を分析し、生徒の進路実現に向けた課題と改善のための方向性を導き出したことは大きな成果である。今後、課題の改善に向け具体的手立てを考えながら組織的な進路指導を行っていくことが課題である。	①総合的な探究の時間の年間計画の中に卒業生による進路講演会や分野別進路説明会を計画し、職業に対する理解を深めさせる。 ①卒業生による大学受験体験講話を計画し、進路実現に向けた受験勉強の進め方等について理解を深めさせる。 ②上級学校見学会の実施を検討する。 ③全校生徒対象の英検校内受験を実施する等、外部英語検定試験への受験を促進させることによって英語の学習に対する意識の向上を図るとともにスキルアップを図っていく。

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月4日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
4	地域等との協働	<p>①学校を取り巻くコミュニティを活かし、地域の教育力を生かした学びの場づくりを推進する。</p> <p>②学校運営協議会制度を有効に活用し、地域と協働した学校運営に努める。</p>	<p>①近隣大学や地域の小中学校、企業との連携や地域交流を促進させ、生徒の学びの場の拡充を図る。</p> <p>②学校の教育活動を外部に積極的に情報発信するとともに、保護者や地域の声を積極的に取り入れながら柔軟な学校運営に取り組み、地域教育力の向上に貢献していく。</p>	<p>①大学の聴講システムやボランティア活動への参加、近隣小中学校との部活動交流等、地域と積極的に連携し、生徒の学びの場の拡充を図る。</p> <p>②中庭の憩いのスペースを積極的に活用し、生徒とPTAや卒業生等が触れ合う活動を行うことができたか。</p> <p>③保護者や地域からの有益な意見を積極的に吸い上げ、学校運営に生かす。</p>	<p>①大学での授業聴講やボランティア活動への参加や、近隣小中学校との部活交流を行うことができたか。</p> <p>②中庭の憩いスペースを活用し、生徒とPTAや卒業生が触れ合う活動を行うことができたか。</p> <p>③保護者や地域からの有益な意見等を学校運営に積極的に反映することができたか。</p>	<p>①高大連携等を活用し、大学の聴講システムやボランティア活動へ参加した。近隣小中学校との部活動交流等、地域自治会等主催のお祭り等にも参加し、生徒の学びの場の拡充を図ることができた。</p> <p>②翔鷹祭文化部門において、中庭の憩いのスペースが在校生や来場者が交流する機会をつくる場になった。また、新たなベンチを作る機会でもPTAと在校生や地域との交流を図ることができた。</p> <p>③学校運営協議会のメンバーからの意見を学校運営に概ね反映することができた。</p>	<p>①積極的に新規の大学の聴講システムやボランティア活動を開拓し、生徒の参加を促進する。今後も近隣小中学校との部活動交流等、地域と積極的に連携し、生徒の学びの場の拡充を図る。</p> <p>②PTAによる美化活動等にボランティアとして参加する生徒が増えるように、生徒への周知の方法を改善する。</p> <p>③今後、学校運営協議会制度をさらに有効活用し、様々な意見を学校運営に取り入れていく。</p>	<p>①高大連携を実施している大学での学びを高校でどのように発展させていくかは大切である。全学的にチームワークを活かした取り組みが広がることを期待する。</p> <p>②学校運営協議会の部会に、「部活動支援部会」を作り、その組織の主催によるバザー等を実施し、そこで得た収益を部活動のための支援金にしたらどうでしょうか。</p> <p>③学校運営協議会のメンバーと生徒さんとの間で直接意見を交換する場を設定してはどうか。</p>	<p>①高大連携を活用し、生徒が大学の授業を聴講したり、研究発表会でプレゼンできたことは探究的な学びの実現という観点から大きな成果であると言える。今後、その学びを具体的にどのように生かしていくかを検討する必要がある。</p> <p>②地域のお祭り等で吹奏楽部や合唱部などが日頃の活動を披露し、本校の教育活動についてアピールできた。生徒にとっても大きな自信につながった。今後も継続し、地域交流、地域貢献を推進していく。</p> <p>③学校運営協議会のメンバーの方から学校運営に関する様々な意見や知恵をいただいた。今後、その一つ一つをしっかりと取り入れていく必要がある。</p>	<p>①高大連携による授業聴講や研究発表を行った生徒は、その内容等について学校でプレゼンする等、探究学習を外部に情報発信することにより学習に対するモチベーションをさらに向上させるとともに、高大連携を活用する生徒を増加させる。</p> <p>②大学や企業との新規連携を積極的に模索し、生徒の学びの場のさらなる拡充を図る。</p> <p>③学校運営協議会のメンバーと生徒会本部役員との意見交換会の場を設定する。</p>
5	学校管理 学校運営	<p>①教員が生徒と向き合う時間を確保するため、教員の働き方改革を推進する。</p> <p>②緊急災害時の対応や事故不祥事の防止にむけて、職員の「当事者意識」を高める。</p>	<p>①業務の無理や無駄の洗い出しをさらに進め、積極的な業務改善を図りながら働き方改革を進めていく。</p> <p>②不祥事防止に向け、教職員のさらなる意識の向上と組織的な点検体制を強化する。</p> <p>③生徒並びに教職員の防災意識のさらなる向上を図るための取組を進めていく。</p>	<p>①年間の企画会議・職員会議の日程の年度当初設定、グループ・学年の会議の回数削減、勤務時間を超えての会議延長の廃止等による業務改善を徹底していく。</p> <p>②不祥事防止会議を中心とした不祥事防止に向けた組織的な取組を強化し、職員一人ひとりの当事者意識をさらに向上させる。</p> <p>③防災訓練の実施方法を工夫し訓練のマンネリ化を防止する。生徒が避難経路を早期に確認するために1学期中に防災訓練を実施する。</p>	<p>①会議の減少や効率化を図ることによって、教員が生徒と向き合う時間を確保することができたか。</p> <p>②職員一人ひとりが当事者意識を持ち、不祥事防止に向け取り組むことができたか。</p> <p>③防災訓練の実施方法の工夫等を通じ、訓練のマンネリ化を解消できたか。生徒並びに職員の防災に対する意識を向上させることができたか。</p>	<p>①年間の企画会議・職員会議の日程は早めに提示されたので、予定が組みやすくなった。</p> <p>②職員全員が当事者意識を持ちながら研修に参加できた。このため意識の向上が見られた。</p> <p>③防災訓練において、グラウンドに集合するまでの順路を各クラスが把握できた。昨今各地で地震が起きている中、年度当初に防災訓練を開催出来たことは大変効果的であった。</p>	<p>①昨年に比べ、会議の所用時間が時期によって長くなることもなかった。来年度も、例えば「会議の時間は長くても1時間まで」のように会議の所用時間の厳守を継続していく。</p> <p>②不祥事防止は恒常的に継続する案件なので、今後も職員全員で取り組む必要がある。</p> <p>③グラウンドまでの順路について2・3年生は理解できているが、1年生は特に入学当初は理解できていない。従って可能な限り早い時期での防災訓練の実施が必要である。いつ何時自然災害が発生するか分からないことから、常に生徒に防災意識を持たせるよう取り組む必要がある。</p>	<p>①学校全体でよい方向に進んでいると考えられる。今後は卒業時アンケートなどによる分析とその活用による評価ができると思う。</p> <p>①「教育現場における働き方改革」が大きな社会問題としてクローズアップされているが、タブレットを使った打合せや会議への活用、部活動時間の短縮等がこれからの課題になると考える。</p> <p>①会議と回議との併用を検討してほしい。</p> <p>②不祥事防止の職員の意識が高いことは大いに評価できる。事故不祥事に関して起きたことを想定したクライシスマネジメントを意識してほしい。</p> <p>③避難路の周知は大切である。加えて、生徒個々の自主的な判断ができる意識の養成も必要である。</p>	<p>①企画会議、職員会議においては、概ね適切な時間内に会議を行うことが出来ていたが、学年会やグループ会議については、業務の都合上会議の開始時間が遅くなり、その影響で勤務時間を超えて会議を継続せざるを得ない状況が発生していたことは今後の課題である。</p> <p>①昨年の12月に「今後の本校の教育の在り方」について全職員で意見交換会を行うことができたことは、職員間での共通理解を図る上で大きな成果であった。今後、具体的な取組について検討を進めていく必要がある。</p> <p>②研修等の実施により職員全体に不祥事防止に対する意識がしっかりと浸透している。その結果、事故につながるようなミスはなかった。今後も継続して意識啓発を行っていく必要がある。</p> <p>③防災指導については、避難訓練等が単なる訓練にならないようどのように工夫していくかが今後の課題である。</p>	<p>①会議はどれだけ長くても1時間で終了する、会議資料はA4両面1枚にまとめる、週に1日ノー残業デーを設定する等の具体的な業務改善策を考え実行していく。</p> <p>①中長期的なスパンに立った年間指導計画や行事の置き方等についての検討を進め、次年度の早い段階で令和7年度の方針を決定する。</p> <p>②不祥事防止会議について、管理職から一方的に問題提起をするのではなく、グループや学年からも不祥事防止に向けた取組についてプレゼンを行う等、全職員で取り組んでいく。</p> <p>③防災訓練については、生徒に実施日を知らせずに突然行うなどより真剣に取り組ませるための工夫をする。</p> <p>④総合的な探究の時間やLHR、全校集会等の時間を活用し、大震災発生時の行動の仕方等、自分の身の守り方について理解を深めさせ、防災意識の定着を図る。</p>